

# 東日本大震災被災地へエールを!



被爆直後(右写真)から見事に復興した城山の街並を背景にしたおやこ記者の集合写真

## 被災地の声を世界に 岩手の高校生平和大使

今年、全国から集まった親子記者9組は、被災地の復興を学びながら、東日本大震災被災地の復興を祈り、エールを送りました。

高校生平和大使の菊地将大さん、佐々木沙耶さんに平和祈念式典の会場でお話を聞きました。被害の大きかった陸前高田市から来られたお二人は東日本大震災の被災者でもあります。

「被災地の声を世界に届けたい」と願って平和大使になりました。街頭で集めた署名を届けに17日、スイス・ジュネーブに向かいます。国連欧州本部でのスピーチでは、被災地支援



# 長崎から復興を学ぼう



発行所  
日本非核宣言自治体協議会  
(にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい)  
〒852-8117  
長崎県長崎市平野町7番8号  
長崎市平和推進課内  
電話 095-844-9923  
FAX 095-846-5170  
E-mail info@nucfreejapan.com  
ホームページ  
http://www.nucfreejapan.com

2011年  
8月9日(火)  
NAGASAKI PEACE  
TIMES

## 復興の象徴 山王神社の大クスノキの成長と共に



被爆クスノキの前で船本宮司のお話を聞く。右は被爆直後のクスノキ。

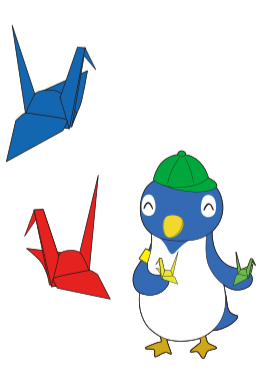
被爆クスノキがある山王神社で、宮司の船本勝之助さんにお話をうかがいました。船本さんは、神社にある被爆クスノキについて、「クスノキは、原爆で枯木のようになったのに、少しずつ葉がしげり、今は幹もすくすく太くなりました。原爆の被害から復興する



インタビューを受ける高校生平和大使の菊地さん(左)と佐々木さん

への感謝の思いを伝えたい、と考えているそうです。66年目の長崎の夏を経験して、お二人は平和について深く考えるようになったそうです。

とき、枯木のようなクスノキが芽ぶくのを見ながら、「クスノキに負けないぞ」と少しずつバラックの家を建てていきました」と話をしてくださいました。船本さんは、原爆から復興したのは、「やっぱりおたがいの努力と日本人の忍耐力があったからこそ」とも話されました。



「庄田実優・浩康記者」

す。「若者の平和への意識を高めていかなければならぬ」と決意を語っていました。「佐藤ハンナ・知道記者」

## カザフスタンの平和へのあゆみ 復興への想い

カザフスタン共和国大使館のクルマンセイト・バトルハン参事官にお話を伺いました。



バトルハン参事官

カザフスタンは1991年の12月にソ連から独立した国です。カザフスタンは、ソ連の一部として戦争に巻き込まれ、世界最大の核実験場もありました。しかし、独立後、「平和のため、世界のため自ら核実験をやめました。そして、日本やカザフスタンは、平和への道を共に歩んでいます」とバトルハンさんは話していました。

バトルハンさんは長崎がこの原子爆弾の被害から復興できた理由は、「長崎市民が平和の夢をあきらめなかったから復興できたし、今年の3月にあった東日本大震災の被災地も、必ず復興できると信じています」と話していました。私は、もう二度とこんなひどい事があつてはいけないうちで思いました。「岡田直子・佳子記者」



田上市長と「長崎平和宣言」をろうあ者の皆さんへ伝える手話通訳者

# 手話で伝えたい想い

手話通訳者

にしかわけん  
西川研さん

平和祈念式典で手話通訳をされた西川研さんにお話を伺いました。大学で手話に出会い、現在、長崎市社会福祉事業団で、ろうあ者の生活支援や相談に関わっています。

西川さんは手話通訳が職業として全国にもっと広まって欲しいと願われています。東日本大震災で被災された、ろうあの方々への支援が不十分



手話通訳をしている西川さん

だと感じているそうです。式典で手話通訳者が初めて中央ステージに立ったのは平成11年です。その背景には、聴覚障害者や手話通訳に対する理解が多くの人々の力で深まった事がありました。私は手話がもっと身近に広まって、皆が安心して暮らせるようになればよいと思いました。

「豊吉佑惟・百恵記者」

# 本当の平和とは

人間が人間らしく生きる

平和を広めるために世界各国を回るピースボートに乗って核兵器の恐ろしさを伝える経験をした田崎昇さんにお話を聞きました。ピースボートは18カ国を回り、田崎さんを含めて9人の被爆者の方は、13カ国14都市で証言をされました。たくさんの方が

平和を広めるために世界各国を回るピースボートに乗って核兵器の恐ろしさを伝える経験をした田崎昇さんにお話を聞きました。ピースボートは18カ国を回り、田崎さんを含めて9人の被爆者の方は、13カ国14都市で証言をされました。たくさんの方が



被爆の実相を海外の人達に伝えたいと語る山脇さん

非核特使の山脇佳朗さんにお話を聞くことができた。山脇さんは、被爆者であり、その時の悲惨でおそろしい体験を自分の言葉で海外の人達に伝えていきます。そのため英会話を勉強したそうです。

# もっと世界中へ伝えたい

原爆を経験した非核特使

海外の人達は、原爆が落ちた後の生活の様子を知らない。山脇さんのお話を聞いてイメージしようとしていたそうです。

復興するにはみんなの意欲、物事を進んでやろうとする気持ちが必要だと山脇さんが話してくれました。

「工藤唯織・英子記者」



インタビューを受ける田崎さん

亡くなってしまった所が原爆と共通しているからだそうです。田崎さんが平和について「戦争がない事だけが平和ではない。困っている人がいたらかわいそうだなと思って見

# 復興につながる平和への祈り

宗教を越えた交流

互いを尊重し、共に「平和」を祈るために慰霊祭を始めたそうです。

最初は、仏教、神道、キリスト教などの十数名の宗教者だったのが、今は55名になり、今年は長崎と縁の深いトルコ共和国のイスラム教からも申し出があり、初めての招待となりました。

「平和を心から祈る気持ちが長崎の復興につながった」という野下神父の話を聞いて、平和になりたいと思う気持ちほどの宗教も同じだと思えました。わたしが家に帰ったら近所の方や友達に伝えて、平和な世界への一歩をふみ出したいです。

「佐藤陽菜・昌子記者」



第39回原爆殉難者慰霊祭へ出席された方々(最下段の左から5番目が野下神父)

第39回原爆殉難者慰霊祭へ行き、野下千年神父に話を聞きました。

信じる宗教はちがっても、「愛、慈悲」といった大切な物は一緒。違う者同士でもお

# 長崎の平和学習を取材しました

## 伝える「6+9=15」 広島、長崎の悲劇と平和 聖マリア学院小学校の平和学習



聖マリア学院小学校で、私は長崎に原爆が落とされた日のミサに参加したり、小・中学生と一緒に初めて平和学習を体験しました。そして、小学3年生の担任をしている安部厚子先生にお話を聞きました。安部先生が「原爆が落とされた日にたくさん亡くなられた人や今も病気で苦しんでいる人たちがいることを伝えてほしい」とおっしゃっているのを聞いて、私はこのように原爆によって長年病気で苦しんでいる人たちがいることを初めて知りました。



聖マリア学院小学校校舎。敷地内にある教会では毎年、長崎原爆の日に祈りがささげられる。

聖マリア学院小学校で、私もそうですが、私の学校にはありません。安部先生も子どもたちに平和を知ってもらいたいとおっしゃっていたので、地元・犬山市の友だちに伝えて戦争の恐ろしさをもっと知ってもらいたいです。

【塩見琴・佳代記者】

## 祈る平和から創る平和へ 江平中学校の平和学習



浦上天主堂から近い長崎市立江平中学校で平和祈念集會が行われました。学年ごとに平和学習の発表や音楽劇、平和実行委員会の「平和の誓い」の発表がありました。2年生の発表で、日本人が朝鮮を植民地にした当時の話を聞いて、衝撃を受けました。



おやこ記者の質問に答える生徒さんたち。平和教育から学ぶことは多いという。

3年生の「どうれつしゃがやってきた」では、戦争で生き残った象が子ども達の希望や平和の象徴となった出来事を音楽劇で紹介していました。江平中学校では年間を通して遺構巡りや被爆者への聞き取り、命の学習など人権、平和

【豊吉佑惟・百恵記者】

# 爆風に耐えたゲストハウス

### あきらめない復興への強い思い

原爆の爆風に耐え、今も残る長崎大学医学部のゲストハウスを訪ね、同大学の相川忠臣先生からお話をうかがいました。

この建物は爆風には耐えただけで、強い熱をあびたせいで、カベに黒いシミが浮き出てくるので、原爆の威力のすさまじさとおそろしさを今でも感じる事ができました。放射能の影響で70年間、草木も生えないと言われていたこの長崎の町がこれほど早く



熱線と爆風に耐えたゲストハウス。原爆の恐怖を当時のまま残している

復興できたのは、原爆が落とされた一年後の放射能の値が通常の値と変わらないことが分かり、またここに住めるんだ、という前向きな気持ちです。



希望が長崎の復興の力になったと語る相川教授

みんなが持つことが大きな理由の一つではないかと相川先生は話してくれました。私は、相川先生のお話を聞いて、原爆のおそろしさと、あきらめない気持ちは大きな力を生むということを友達や家族に伝えていきたいです。

【竹村春花・博和記者】

# 放射線がおよぼす 人体への影響

## 目にみえない恐怖



放射線の人体への影響について語る高村教授

長崎大学で、放射線による人体への影響などを研究している高村昇教授にお話をうかがいました。高村教授は、「なぜ、大量に放射線を浴びると病気になるのか」について、わかりやすく話してくださいました。

「放射線は、細ぼうの中にある遺伝子を傷つけます。少しでもあれば元にもどりますが、大量にあびてしまうと、傷ついたり、遺伝子を治せなかつたり、ましがえて治

してしまったりします。そうになると、白血病やがん等の病気になってしまいます。ただ、まだわかっていないこともたくさんあります。また、最後に「長崎が原爆の被害から復興したのは、市民の懸命な努力があったからでしょう。震災の被災地も、長崎、広島のように、必ず復興すると思います」とも、話してくださいました。

私は、放射線は、なにも自分の体で感じることができないのに、これだけ人体におよぼす影響が大きいことが本当におそろしいと思いました。

【庄田実優・浩康記者】

# 平和への思い・復興への願い

## 広がれ!

## 桜色の笑顔

### 桜が つなぐ 平和の願い



永井千本桜の植樹



桜の木の植樹について熱い思いを語る朝長院長

長崎如己の会理事長であり、日赤長崎原爆病院の院長でもある朝長万左男さんにお話を伺いました。朝長先生は故永井隆博士の「原子野を再び花咲く丘にしたい」という思いを継承し、桜の植樹千本を目指して現在精力的に活動していらつしゃいます。桜の木を増やす事で人々の精神的支えとなり、それが復興の原動力になってほしいという朝長先生の熱い思いが伝わりました。平和の思いが込められた桜の木が精神的な復興のシンボル

となり日本中に広がって、みんなに笑顔をもたらしてくれたいと思います。

【泉菜々星・敦子記者】

## 被爆者のことばを 次の世代に

### 朝日新聞・ナガサキノート



インタビューに答える「ナガサキノート」担当の大隈記者

朝日新聞長崎県版に、平成20年8月10日から毎日連載されている「ナガサキノート」の担当記者の一人、大隈崇さんにお話をうかがいました。ナガサキノートは高齢化する被爆者の証言を、若い記者たちが取材し、まとめたものです。「つらい体験をどこまで聞いてよいのか、なやむこともある」と大隈さんは言っていました。しかし「証言をするために生かされている」という被爆者の思いに「応え、よりそいたい」と思っているそうです。

## 皆の力を信じて

### 劇団TABIHAKUのつだけいこさん

つださんは、被爆者・和田耕一さんの被爆体験をもとに「チンチン電車の詩」という朗読劇を制作し、昨年の国際平和シンポジウムで上演されました。

長崎電鉄の路面電車の車掌として宮崎からやって来た12歳と13歳の姉妹が、親元から離れ、心細いながらも力を合わせて勤労奉仕に努めていた矢先、勤務中に被爆。妹は3日後に息を引き取り、姉は遺



劇団TABIHAKUのつだけいこさん

骨を抱えて故郷へ戻る。長崎の町全体が絶望に沈む中、電車の力強い走り、人々に夢や希望を与えるという話です。



「チンチン電車の詩」の一場面

つださんは、一人ひとりのエピソードを通じて、戦争の恐ろしさ、悲惨さを伝えていきたいし、同じ痛みを分け合い、皆が力を合わせる事が復興につながっていったと話されました。

わたしは、これからも戦争を絶対してはいけなとあらためて思いました。

【佐藤陽菜・昌子記者】

## ボランティアスタッフが 平和劇披露



おやこ記者新聞制作をサポートしたボランティアスタッフを中心になって、最終日の新聞制作発表会で、「としさんのあやの食堂」という平和劇を披露しました。内容は東京から来たおやこ記者が被爆者の女性を取材し、平和の尊さを学ぶという物語です。大村市の市民劇団「夢桜」と県立大学シールト校の学生ボランティアのみなさんが出演協力してくれました。

## 平和へのメッセージ 2011

66回目の長崎原爆の日を迎えた今年は、それぞれの取材先の方達にメッセージを書いてもらいました。



高校生平和大使の佐々木沙耶さん

●佐藤ハンナ・知道記者



よりよい未来へ立て直してこうというサラさん

●工藤唯織・英子記者



江平中学校1年の木原祈りさん

●豊吉佑惟・百恵記者



# みんなでシャツターを切ろう

## わすれてはならない、あの日、あの時

若杉鏡心さんにお話を聞きました。若杉さんは、「8月9日11時02分にシャツターを切ろう」ということを全国の人の呼びかけています。そのわけは、11時2分に原爆が落ちたことを今はずすれている



8月9日11時2分に原爆が落ちたことを忘れないようにと語る若杉さん



11時2分の一場面

人達がいるから、知らせるために、シャツターを切ろうという企画を考えました。若杉さんは今64歳だそうです。原爆で亡くなった人達に、

「今は、こんなに幸せにくらしている。二度と核兵器を使わないよ」と伝えたいそうです。「その被害をかくして町をきれいにすることは復興ではなく、みんなが8月9日の11時2分に原爆が落ちたことを忘れないようにすることが復興だ」と若杉さんが話してくれました。

若杉さんにお話を聞き、写真を見せてもらって、ぼくも自分が見える平和な世界を写真にとつて、若杉さんに協力したいです。

# 世界に届け平和を愛する心

## 音楽で伝える平和

音楽を通じて世界に平和を発信しているユニット「ドウ・マルシェ」のミニ平和コンサートを聴き、終了後二人にインタビューをしました。

お二人は、長崎を何度かおとずれうち、被爆者との出会いや遺構巡りの中で原爆の恐ろしさにショックを受け、平和の大切さを実



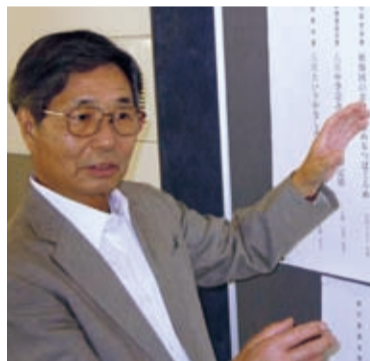
ドウ・マルシェのお2人、牧千恵子さん(左) Miyackさん

「泉菜々星・敦子記者」  
「生きた」という曲に込め、日本のみならず世界へと発信しています。バイオリンの優雅さとアコーディオンの力強い音のウエイヴが心に響き、感動となり、平和を願わずにはいられません。一日も早く平和な世界がおとずれますように。

長崎原爆忌平和祈念俳句大会実行委員長の前川弘明さんにお話を伺いました。

前川さんは、10歳の時に原爆を受けたそうで、「原爆はあつてはならない」という強い思いから昭和29年に第一回の俳句大会を開き、以後、現在まで活動を続けてきているとのこと。

前川さんは「継続することは大切なことです。これからも、



俳句を通して平和を訴えたいと語る前川さん

# 俳句の力を信じて…

## 届け！この思い日本中に

俳句を通して平和を訴えていきたいと思えます」と話してくれました。

最後に前川さんから、東日本大震災の被災地の皆さんに向けて「長崎では、70年間草木も生えないと言われていましたが、生きたいんだ、また長崎の町に住みたいんだという強い思いと、皆が力を合わせることで、ここまで復興をできました。被災地の皆さんもぜひ日本中の皆と力を合わせて復興をがんばっていきましょう」とのお言葉をいただきました。



「竹村春花・博和記者」

「原爆をやめようという想いで、毎年8月8日〜10日の期間、原爆資料館地下2階の円形ホールで生け花を展示されている「草月会」の、長崎県支部長・渡辺久江さん達にお話を伺いました。

この展示は平成8年から始まり、今年で16年目です。毎年、生け花に平和への祈りを込めて生けられています。今年は、静かな色の花に草月流が好んで使う竹を組み合わせてあり、おだやかなその雰囲気、思いが伝わってきました。

「岡田直子・佳子記者」

## 生け花に祈りをこめて



草月会の皆様と一緒に

# 原爆はもういない

## 長崎から東日本大震災被災地への応援メッセージ



被災地の平和を望んでいるジョシュアさん  
●泉菜々星・敦子記者



岡山県玉野市から来た木下真さん  
●佐藤陽菜・昌子記者



愛知県名古屋から来た西村志奈さん  
●竹村春花・博和記者



沖縄県中城村から来た真崎かれんさん  
●庄田実優・浩康記者



城山小学校5・6年生のみなさん  
●岡田直子・佳子記者



聖マリア学院小学校6年の大平麻耶子さん  
●塩見琴・佳代記者

# 希望の光



## それぞれの地元で聞きました

日本非核宣言自治体協議会が発行する『ナガサキ・ピースタイムズ』おやこ記者新聞』は、今年で第4号目の発行となりました。今年度は全国から210組もの応募があり、地域ブロック別の抽選により9組の親子記者が選ばれました。

今年も親子記者は8月9日に行われる長崎市の平和祈念式典のほか、長崎での平和への取り組みや活動を、小学生親子の視点で取材して新聞を作成しました。今年も東日本大震災が起こり、人々や建物が甚大な被害を受けました。66年前の戦争では長崎や広島だけではなく、全国各地のいろいろな都市で空襲を受けるなどして、街が破壊されたり家族を失っ

### 道民の記憶を本に

北海道帯広市  
豊吉 佑惟さん(6年生)  
百恵さん

7月2日、「帯広ふだん記」の会」会長である松崎拓郎さんにお話を伺いました。「ふだん記運動」は50年以上も前からあり、全国各地に組織があります。随想・記録集のほか、戦時中の体験も多くつづられていきます。当時の様子や辛い思い出を読み、心が痛みました。アメリカとソ連から攻撃されたこと、カラフトや満州での体験など興味深いものばかりです。

松崎さんは、

「ふだん記」という本にすることで、後世に残し、平和の尊さ、願いを私たちに伝えていくのだと思います。二度と戦争をおこしてはいけません。思いました。

北海道帯広市 小学校1年生の時、千島にいた父がソ連の攻撃から逃れるために、厚床に引き揚げてきたものを入れた袋を持ち歩いていたり、かぼちゃと芋、魚を食べていて、食べ物には不自由なことが多かったことなど話して下さいました。



### 東北ブロック

秋田県秋田市  
工藤 唯織さん(4年生)  
英子さん

7月24日、秋田市土崎図書館で開かれた「戦争と原爆」展」に行ってきた。その時、長崎平和推進協会の早崎猪之助さんの原爆の体験談を聞かせていただきました。

土崎で1945年、8月14日から15日にかけて、日本最後の空襲がありました。アメリカのB29という爆撃機が132機飛来し、1万2047発の爆弾が落とされました。ぼくのおじいさんが5才の時に、夜、たまたま音で目がさめて外に出て見たら、土崎の方が見たいにとても明るかったと言っていました。家から土崎までは、約8kmはなれていました。火が消えるまで1週間もかかったそうです。なぜこのような戦争が起きたのでしょうか。ぼくはこうたのでしようか。ぼくはこうううざんこくな戦争は、二度と起きないように、みんなが助けあって、仲良く平和な世界を作っていきたいなと思います。

秋田での土崎空襲



### 被爆体験者の方の話聞いて

愛知県犬山市  
塩見 琴さん(5年生)  
佳代さん

私の住む愛知県犬山市に被爆体験者が住んでいると聞き取材してきました。

当時、10歳だった石村さんは疎開していましたが、石村さんのお父さんが広島市内で被爆しなくなりました。お母さんがお父さんの亡くなった場所をどうしても石村さんに見せておきたいと広島市内に入り入市被爆しました。「死体の山を焼く光景、赤く染まって死体だらけの川、そして広島市内は何もかもなくなっていました。

石村さんは「最後まで決してあきらめないで希望を持ち続けて努力することが大切だ」とお話しくださいました。

被爆体験者の方の話聞いて



### 関東ブロック

神奈川県鎌倉市  
佐藤ハンナさん(4年生)  
知道さん

7月5日、鎌倉芸術館小ホールで「夏の会」による「夏の雲は忘れない」という朗読劇が上演されました。広島・長崎の原爆で被害にあった小中学生たちの手記が次々と朗読されるとともに舞台のスクリーンには原爆の悲劇を伝える様々な映像が映し出され、600席のホールを埋めた人々は、平和への思いを新たにしました。

出演した女優のお一人長内美那子さんが鎌倉在住であることから、市民の実行委員会が作られ、

「夏の雲は忘れない」を観て

平和推進実行委員会、鎌倉市と共催で公演が実現しました。原爆の悲劇を繰り返さず、平和を語り継いでいくために多くの人の見てもらいたいという思いで準備をしたと、実行委員会の皆さんは話していました。



### 初めて聞いた祖父の戦争体験

大阪府富田林市  
岡田 直子さん(4年生)  
佳子さん

私は、今回、長崎に行くことが決まって、初めておじいちゃんに戦争について話を聞きました。おじいちゃん、昭和20年3月13日の「大阪空襲」について話してくれました。B29の攻撃で家は焼け、逃げ込んだ防空壕にも火が廻ってきて、堀江川沿いに逃げましたが、その間も焼夷弾が次々と投下され、目の前でバタバタ人が倒れ、火災の熱気から逃れるため川に飛び込んで夜が明けるのを待ったそうです。死に直面した恐怖よりも、熱さから身を守るのに必死だったそうです。

それから、おじいちゃんは一冊の写真集を見せてくれました。それは大阪空襲を記録したものでした。一面の焼け野原になった大阪の街。難波も梅田も何にもない瓦礫の山。その写真は今年3月の東日本大震災の写真と似ています。今の大阪の街を見ると、高層ビルが立ち並んで、焼け野原だったとは思えません。きっと、東北の町も見事に復興すると願っています。

初めて聞いた祖父の戦争体験



# とどけ!

## 戦災と復興のお話をそれ

たりしました。そのような戦争の傷跡から人々や街がどのようなように立ち直っていったかを知ることは、被災地の方々への希望にもつながるのではないかと考え、第4号は「復興・長崎から被災地へ届けるエール」というテーマで取材しました。

親子記者は長崎で取材する前に、それぞれの地元で、戦争のつめ跡や、戦争を体験した人、また、平和活動を行っている方に取材を行い、街や建物がどのように復興していったのか、また、悲しみの淵にいる人々の心がどのように立ち直っていったのか、前へ進むきっかけは何であったのかなど、復興への道筋について理解を深めました。



### 私の町、広島の復興

学校で毎年、話をして下さる真木淳治さんに、原爆の落ちた後の広島でどう生きてこられたかを伺いました。

「街は全てを失い、子供達は疎開から戻ったら、家も家族もなかった。『ま、住む所を』と、がれきの上にバラックが建っていた」と真木さんは話してくれました。

なぜ頑張れたのか聞いてみると「戦時中、とても悲しい体験をした。それを思い出すと、どんなことでも乗り越えられた。そして、辛かったからこそ

そ、沢山の人の聞いて欲しい」と力強く答えてくださいました。

本当に、戦争はもうやってはならない、と改めて感じました。



広島県広島市  
庄田 実優さん(5年生) 浩康さん  
中国ブロック

### ひいおばあちゃんの復興の話

軍の施設や工場がたくさんあった久留米も空襲にあいました。私のひいおばあちゃんに話をききました。「焼夷弾が次々と落ちてきて、街の通りは全焼し何も残らなかった。橋の下に逃げた多くの人々が、重なり合って死んでいた。全てを失い、初め

から出直すしかなかった。自分だけではなく家族もいたし、周りの人達と助け合えたから立ち直れた」というその言葉に、「周りの人とのつながりや希望」があったからこそ復興できたのだと思いました。



福岡県久留米市  
佐藤 陽菜さん(4年生) 昌子さん  
九州ブロック



### 曾祖父から聞いた復興の話

曾祖父の話では、空襲により焼け、多くの人が亡くなった町の人達は、たくさんの大切なものを失い、深い悲しみと絶望に包まれながらも、焼け

け落ちた町を元に戻すために力を合わせて復興を推し進め、現在のにぎやかな町を再び作り上げてきたとのことです。でも、二度と元には戻りません。

私は、曾祖父の話から改めて平和の大切さ、命の尊さを学び、戦争を絶対に繰り返してはならないと強く心に誓いました。



高知県高知市  
竹村 春花さん(6年生) 博和さん  
四国ブロック

### 青春時代は戦時中

7月7日、同じ地域にお住まいの真喜志善子さんにお話を伺いました。太平洋戦争当時16歳だった真喜志さんは、看護士として軍に配属され負傷兵の看護にあたったそうです。話をしながらも悲しな体験を思い出し、時折涙ぐみ、体を震わせていました。

真喜志さんの家族は、小さな兄弟を抱えながらも必ずみんなで生きていこうと前向きな気持ちでがんばったそうです。66年がたった今でも色あせる事のない記憶を残し、

悲しみの涙をもたらす戦争はこの地球上に絶対あつてはならないものだと思います。



沖縄県沖縄市  
泉 菜々星さん(4年生) 敦子さん  
沖縄ブロック

編集 後記



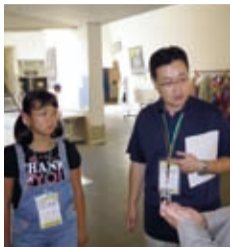
事務局だより

今回でおよこ記者新聞は4年目を迎えました。今年、東日本震災の被災地から高校生平和大使に任命された陸前高田高校の生徒二人に取材を行うなど、親子記者の皆さんが暑い中がんばってくれました。この新聞をぜひとも被災地の方々に読んでいただき、少しでも復興に向けて励みになることを願っています。取材風景はホームページでも公開していきますので、のぞいてみてくださいね。

はだで感じた原爆のおそろしさ

四国ブロック 高知県高知市

たけむら はるか ひろかず 竹村春花・博和記者



原爆資料館にあった黒こげの死体や大ヤケドを負った少年を写した写真を見て、改めて戦争のむなしさとおそろしさを知りました。これから、高知に帰ってもここで学んだことを、友達に伝えたり、家族に知ってもらったりしたいです。

原爆と平和を伝えたい

中部ブロック 愛知県犬山市

しほみこと かよ 塩見琴・佳代記者



この4日間、長崎の原爆の事と、平和の事について詳しく学ぶことが出来ました。原爆によって長年病気で苦しんでいる人たちがいることと、田崎昇さんが言った「人間が人間らしく生きることが平和」という言葉が印象に残っています。



平和な世界を願って

北海道ブロック 北海道帯広市

とよよし ゆい ももえ 豊吉佑惟・百恵記者



初めて長崎に来て、とても素敵な街だと感じました。中学生や手話通訳者の方々とふれ合い、平和への想いや私達が後世に伝えるべき事を学びました。新聞を作るなかで、戦争の恐ろしさや醜さを知りました。世界中の戦争がなくなる事を願っています。

長崎に来て

九州ブロック 福岡県久留米市

さとう はるか なまき こ 佐藤陽菜・昌子記者



平和祈念式典に参列し原爆の遺構を巡り、学ぶことの多い4日間でした。平和を願う気持ちは、宗教や文化・人種の垣根を超えて人間同士を結びつける事を実感しました。夢や希望を持つ事、人との絆を大切にすることは、何があっても失ってはいけないと思いました。

平和な未来のために

近畿ブロック 大阪府富田林市

おかだ なおこ よしこ 岡田直子・佳子記者



長崎での4日間で、すごく原爆に近づけたと思います。今年、東日本大震災が起こり、福島の原発問題で改めて広島や長崎も注目され、核について考え直さなければいけないと思いました。大阪に帰って、この経験を皆に伝えていきたいです。

「平和」の大切さ

東北ブロック 秋田県秋田市

くどう いおり えいこ 工藤唯織・英子記者



みんながなかよくしないと平和にはならないと思いました。戦争が二度と無いように、一人ひとりが平和を大切にしないと成り立たないことが分かりました。およこ記者新聞が出来たらみんなに見せて平和について考えたいです。



感動いっぱいの長崎平和学習

沖縄ブロック 沖縄県沖縄市

いずみ なな せ あつこ 泉菜々星・敦子記者



今回の取材を通して、とてもたくさんのお話を勉強しました。今、一番心に残っているのは、「平和な世界は一人では作れない、みんなの思いと行動で築きあげていくものだ」という事です。今回親子で学んだ平和への思いを、これからは多くの人に広げていきたいと思っています。

「長崎」を通して「広島」を知る

中国ブロック 広島県広島市

しょうだ みゆ ひろやす 庄田実優・浩康記者



今回、私たち親子は被爆地・広島から参加させていただきました。長崎にも広島と同様、多くの被害があり、現在も多くの被爆者が精神的、身体的に苦しんでおられることに心が痛んだ。広島に住む者として、原爆、戦争のことをもっと勉強し、多くの人に伝える必要があると感じた。

平和のメッセンジャー

関東ブロック 神奈川県鎌倉市

さとう ハンナ・ともみち 佐藤ハンナ・知道記者



緊張しながら初めての取材体験でしたが、多くのことを学ぶことができました。世界に平和を発信し続けている高校生、被爆者の平和への願いを毎日420字に綴り続けている若い記者の姿に触発されて、私たちも微力ながら平和のメッセンジャーになりたいと思います。

学生ボランティア大活躍!

今年もボランティアスタッフとして、長崎県立大学シーボルト校国際情報学部情報メディア学科の学生10名に参加していただきました。(コメントは写真右上から左下)

- ♡ 平和や復興について考え直す良い機会でした。 // 森本竜也 //
- ♡ 長崎の平和に対する強い思いが伝わりました。 // 坂下翔子 //
- ♡ これからも平和について考えていきたいです。 // 杉原由記 //
- ♡ 私にとっても貴重な経験となりました。 // 藤田典子 //
- ♡ 人に優しくすることが平和への近道と感じた。 // 中村雅英 //
- ♡ 学生生活最後の楽しい思い出ができてよかったです。 // 田尻由佳 //
- ♡ 長崎の復興の歴史を未来の希望にしてほしい。 // 上野綾香 //
- ♡ 様々な平和への想いを取材できてよかったです。 // 鹿野 瞳 //
- ♡ 貴重なお話が聞けて勉強になりました。 // 西 桃子 //
- ♡ 親子記者と一緒に沢山のことを学びました。 // 白石彩乃 //

